

Title	「記憶がある」ということについての会話分析
Author(s)	千々岩, 宏晃
Citation	間谷論集. 2018, 12, p. 27-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89849
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈研究論文〉

「記憶がある」ということについての会話分析

千々岩 宏晃

1. はじめに

本稿の目的は、語りの最後に「記憶がある」と述べることで、どのような相互行為を構成し、どのような相互行為の資源となっているのかを記述しようとするものである。

その結果、日常の雑談の中で“記憶があること”に言及することが、(1) 語りの終了を示す資源であること、(2) 体験を述べることによって相手に共感や賛同といった親和的 (affiliative) な行為を構成すること、(3) 相手に親和的になることのできる証拠として利用可能かの判断をゆだねていること、の3点を特徴とすることを、会話分析の手法を用いて例証した。

本稿で対象にする発話の、基本的な連鎖構造は以下のとおりである。

- 01 A : 愚痴や問題があることなどの評価の語り
- 02 B : 01A の評価と同様の要点を持つ語り
(発話末に記憶があることの発話)
- 03 A : 理解や同意

2. 先行研究

本節では、会話研究における記憶の扱いについて概観する。また、今回観察された連鎖に関わる「語り」と、記憶との関わりについて述べる。

2-1. 会話研究における記憶の扱い

会話における記憶概念の研究は、1970年ごろから認知科学の発展とともに

徐々になされてきた。その中でも特に、会話における記憶との関係を扱ってきたものに言説心理学 (Discursive Psychology、以下 DP) がある。DP は認知心理学が実験環境のみを対象としていることに反発して発生した談話分析 (Discourse Analysis、以下 DA) の一分野である (Potter 2003)。しかし、成果を十分に検討できない以下のような方法論上の課題を含んでいると考えられる。(cf. Coulter 1999, Coulter 2004)。

課題 (a) DP の手法が、認知心理学的現象をトピックとして扱うと述べている点。Potter and Edwards (2013) は、DP は従来心理学で扱われてきた要素をトピックとして扱う、としている¹。しかしそれは、心理学的トピックが実在論的に存在することを前提としてしまい、現象に既存の心理学的な説明を加えただけのものになりかねない。

課題 (b) DP では主に DA の手法が用いられるが、その場合、粗いトランスクリプトが原因で後の研究者が再検討できない状況にある点。

この2点の研究上の課題を Goodman and Walker (2016) (以下、G&W) を追検証することによって例証する。G&W は以下のような断片を紹介している。

1. I: オーケー、じゃあ最初の真剣な交際について聞きますね。交際の中で
2. 暴力をふるったことはありましたか？
3. P5: いいえ、
4. I: ぜんぜん？ひどい言葉も？
5. P5: いいえ、私の覚えてる限りではです。すごく前の話なもので、
6. I: ええ、
7. P5: つまりえっと口論とか口喧嘩みたいなのはありましたけど、でも体や心
8. に対しての虐待ってのはその時にに関しては確かにありませんでした。

Goodman and Walker (2016 ; p.381 内の断片 1) [訳は引用者による]

まず課題 (a) から検証していく。

この断片は、I (interviewer) と P5 (男性) の IPV (パートナー間暴力) の面談場面である。G&W は、P5 が「疑わしきもの」としてそこにいる、と記述している。G&W は、「覚えている」という記憶概念を含む 5 行目の発話を、① 4 行目の疑いを含意した発話に対して、それを避けようとする発話である、としている。また、② 5 行目で「すごく前の話なもんで」と付け加えることにより、常識的にいってその記憶の不在がリアリティーを持ったものとして理解されるように用いられている、と記述している。そして最後に、③ 彼が「もし暴力行為の証拠が出されてもそれを否定できるようにしている」としている。

このように、G&W では、「記憶」を既存の概念としてまずは道具立てし、それを使って何をしているか、ということの説明するという前提が存在する。しかし、「暴力行為の証拠が出されてもそれを否定している」という予防線説は証拠に欠ける。

そもそも、1～2 行目の I の発話は、Yes/No 質問であり、P5 の応答は No である。しかし、それを I が 4 行目で再度質問することは、P5 の先の答えが充分ではなかったことを示している。そこで P5 は 5 行目で、I が要求するものへと答えを変えている。

また、P5 は最初から不利な立場にある。というのも、起こっていないことを証拠づけるのは通常困難だからだ。暴力事実がなかったと否定する根拠を、いったんは自らの昔の記憶に求めているが、しかし昔のことをはっきりと覚えていても、逆に「なぜ昔のことなのにそんなに鮮明に覚えているのか」と逆にでっち上げているのではないかと疑わしい。

それゆえ、P5 はさらに、いざこざや口論はあったことを認めることで、自身を十分に情報を持ち、自らの過去を十分に語り得るものであるという役割におく。そして自分の理解においてはなかった、という、否定への根拠づけを再度行っているのである。

この断片において、インタビュー場面における立場の不均衡と、起こっていないことの立証の困難性は、より観察可能かつ事実に基づいた詳細な記述だといえるだろう。しかし、G&W の分析では、「もし暴力行為の証拠が出されてもそれを否定できるようにしている」というように、記憶をいわば別途に存在する道具

として、追及をかわすものとして用いられているという分析者の解釈に留まっているのではないかという疑念を持つ。

さらに、課題(b)として指摘したいのが、“粗い”トランスクリプトが他の研究者による検証を難しくしている点である。P5の発話5行目と7行目は6行目のIの発話によって隔てられているように見える。しかし、もし接続した発話であれば(そしてそれがトランスクリプトに示されていれば)、P5自身が、早い段階で証拠を記憶に求めることは得策ではないことに気づいていたことの証拠になり得る。しかし、G&Wのトランスクリプトは“粗い”ために、参加者の行為の分析の重要な要素になる重なりや発話の間隔が示されていない。そのため、他の研究者が肯定も検討もできない、という事態に陥っている。

一方で、より詳細なトランスクリプトを用いて、記憶を相互行為の資源として扱う研究群も存在する。これら研究は、エスノメソドロジー(Ethnomethodology、以下EM)や、会話分析(Conversation Analysis、以下CA)の手法を用いている。ただし、これら研究群では、認知心理学におけるいわゆる「記憶」の概念に対しては、積極的に無関心である。

例えば、CAの研究であるGoodwin(1987)の、共同で経験した事柄(=思い出)を持つ相手に、想起の最中に視線を分配するという研究や、Hayashi(2012)の想起の発話末の要素「つけ」の認知的権限に関する研究では、記憶は相互行為的な資源として扱われているが、記憶概念について、Potter(2006)がDrew(2005)を批判するように、CA研究者は記述に認知主義色の強いrememberを避けて、同等の意味を持つrecall等の用語を無反省に用いている(これを課題(c)と呼ぶ)。

また、EMの研究である西阪(2001)の「そうそう!」などの想起の発話における成員カテゴリー³の再構成に関する研究や、前田(2008)の失語症者における想起の能力帰属等の研究では、心理学的要素を否定しながら、「記憶」の社会的相互的側面に焦点を当てている。

しかし、そもそも活動としての「想起」が、発話内で言及される「記憶」とどのような関係を持つのかを積極的に論じてはいない。平本(2011)、Smith(2013)のように、「思う」、「わかる」等の心的動詞の使用を連鎖・行為レベルで記述す

るものもあるが、本稿で検証するような、参加者が直接記憶に言及する例に関しては未検証であるといえる（これを課題(d)と呼ぶ）。

これら記憶に関わる研究の概観から、以下の4点が、本稿での「記憶がある」ということを記述する際の前提であり、本稿の意義であると言える。それらは、以下の4点。

- 課題(a)の解決 心理学的な要素を前提としない記憶に関する研究であること
- 課題(b)の解決 詳細なデータ観察による研究であること
- 課題(c)の解決 記述を心理学的な用語を用いずに行うこと
- 課題(d)の解決 「記憶がある」という（あたかも）記憶の存在を述べているような発話の、社会的行為としての記述であること

2-2. 「語り」と記憶に関する研究

本節では、記憶と「語り」の関係について述べる。「語り」といわれる記憶との関係については未解決の部分も多い。Shuman(1986 p.20)は、研究者が混乱しやすい概念として「語り」、「イベント」、「経験 (Experience)」を挙げている。Shumanによれば、「経験」とは、日常を形作る、活動の重なり合った一連の流れであり、イベントは開始-終了がある下位区分である。それに対し、「語り」は経験をイベントとして枠付けする。我々が「記憶」として語るときは、おそらくShumanの述べる意味での「語り」として、想起した経験を枠づけていると考えられる。

では、心理学でたびたび言及される通り、語りは記憶を“取り出して”語っているといえるだろうか。

まず、「語り」は記憶の取り出しを論じる以前に、開始-終了という構造体をもった一つの組織だった行為である (Mandelbaum 2012) ことに注意が必要だ。同時に、聞き手は適切な反応や評価をすることで、語りに協働しており、反応から得られた相手の知識状態に合わせて語りの方向を修正するような相互行為的性質を持っている。さらに、語りは、行為の媒介としてもちいられる、とされている。批判や、文句、からかいなどのために、語りが用いられることも多い。その

ため、たとえ「記憶がある」と語りを終えることも、それが何らかの組織だった行為であることが期待できる。

また、「語り」が他の語りを後方へと隣接させる現象については、第2の語り (second-story; Sacks 1992 ; vol.2:pp.249-260, Jefferson 1978) として扱われている。これも、ある語りに触発 (triggered) されて、思い出したことを「記憶」を取り出している語っている、という (認知心理学的な) 直感を覚えてもおかしくはない。

しかし、Sacks は 1970 年春の講義の中で、「第2の語り」について、単に第1の語りに「似ている」語りをせよ、というルールだけでは記述出来ない、と述べている。第2の語り、直前の語りを理解したという「証拠を出すことをすること (doing provings)」をしているのではないかと述べている (vol.2, pp.251-252)。ここから、第2の語りも何らかの相互行為的性質を帯びていることがわかる。

ただし、Sacks は記憶と語りの関係について「まだ話す準備はできていない」とし、タイミングやトピックの理解、思い出しへの誘いかけの効果などから、「記憶が会話組織に用いられているように思える (all of which seem to suggest at least that memory is at the service of the organization of conversation)」と述べるにとどまっている (Sacks 1992 ; vol.2: p.29)。それ以降、語りと記憶の関係は前節 (課題(c)) でみたようにいわば公然の事実として扱われ、積極的に論じられてはいない。

また、Hacking (1995=ハッキング1998) は多重人格 (Multiple Personality Disorder) の症状が急増したことと想起との関係について、想起がセラピストとの間で現在の時点から過去の体験を再解釈する作業であるとしている。それは、例えば多重人格の原因となる「トラウマ」や、「幼児虐待」などという、過去 (1970 年代) には存在しなかった概念によって、現在の時点から過去を再定義する、それが我々の呼ぶ記憶なのだ、という主張である⁴。

Hacking の主張は示唆的である。しかし、その書き換えは、日常会話でも行われているといえるのか、日常会話でセラピストにあたる役割の人は存在するのか、という非制度的場面への適合性に関する疑問が残されている。

3. 研究の目的

本研究では、語りの最後に「記憶がある」と参加者が発話する場合について分析する。しかし、これは単に記憶がある、ということを行っているだけではないことが、先行研究から予想される。

とすれば、語りの最後に「記憶がある」と、記憶があることを言うことは、それに見合うだけの局所的かつ参加者にとって合理的な理由が存在する、と仮定できる。

本研究の目標は、その「理由」の記述である。言い換えれば、語りの最後に「記憶がある」ということで、どのような相互行為が行われているのか、「記憶」がどのような相互行為の資源となっているのかを記述しようということが目的である。

4. 研究の対象と方法

本研究の対象となるのは、自然談話、特に雑談である。その理由は、雑談の記憶に結び付いた発話に関する研究は少数であり、従来の研究のほとんどが制度的場面を用いたものであるからだ。

分析対象は、会話コーパスの CallFriend(約 13 時間分; MacWhinney 2007) と、本稿の筆者が採集した動画データ(約 8 時間)、その文字化資料である。音声、動画は西阪 [他](2013) を参考に文字化した。

「記憶がある」が用いられている発話を抜き出し(計 28 例)、Schegloff(2007) に従い、隣接ペア(adjacency pair; Sacks, Schegloff and Jefferson 1974) を基礎とする連鎖組織で記述した。本研究では、行為を明示したもの(cf. 筒井 2012) が視認性が高いと考え、トランスクリプトに【】で併記する形を採用した。

その後、連鎖環境が共通する例を抜き出した。それが、「記憶がある」が語りの終了の後に用いられるもの(計 9 例)である。

本稿では本稿への他者による後の検証を容易にするために(Lynch and Wong 2016; p.536)、CallFriend の断片を代表例として掲載、分析、記述する。

5. 分析

5節では、3つの類似する断片を記述し、共通連鎖の抽出と各断片の記述を行う。まずは断片1を見てみよう。

断片1 CallFriend japn1841 辞書引いた記憶

((Mはアメリカの大学での滞在が長い為、様々な専門用語を英語では知っているが、日本語では知らない、という母語と学習言語との逆転が起こっている。上顎の一部である口蓋 (palate) は英語でなにか、とYが聞くが、Mは間違った語をいったため、Mを茶化す。そののちの会話。))

- 09 M: だから :(0.5)a-ta- あっ palatal っていうのかな? ふん [じゃ:: 【修復操作】
- 10 Y: >あ::あ::< 【理解】
- 11 .hhh なんか (0.4) それはなんかおれ発音 ::-(0.2)i- 日本語の発音 :: の
- 12 本をなんか (0.3) 面白がって読んでたときにい、 【語りの開始】
- 13 M: ん :::
- 14 Y: .hhhh あの ::(:) いろいろと英語で説明があつて :: 【語り】
- 15 M: ん ::
- 16 Y: であ :: なるほど舌をどこにつけるあそこにつけるって書いてあんだ
- 17 けどお :: 【語り】
- 18 M: ん :
- 19 Y: ii 字でね? 【自己修復操作】
- 20 M: ん :: 【理解】
- 21 Y: ど (h) こ (h) のことかわかんないじゃない? = 専門用語で、 【同意要求】
- 22 M: :>うん [うんうん< 【同意】
- 23 Y: → [hhhh >でく↑どこのことなんだろうと思 [ってそ:こだけ辞書
- 24 [hhh
- 25 Y: → ひいた記憶があるよ。 = 【語りの終了】
- 26 M: =あ :: あたしいそれを英語で言ってくれれば分かるんだけど :: 【不満】

- 27 Y: >あ::あ::く 【理解】
- 28 M: あのお::日本語で言われると:もう分かんないん>だよく(.)お手上げ
- 29 って感じ。 【不満】
- 30 Y: あ::あ::hhhh 【理解】
- 31 M: °は::あ[ん°
- 32 Y: >まくだ日本語だってふつう口の中の細かい場所のい-位置なんて
- 33 分かんないよね: 【同-意見提示】

09行目は、この断片が始まる前にYが口にした質問「口蓋って英語でなんていうの?」に対する応答である。そして、この応答はいくつもの挿入連鎖を挟みながら、ついに連鎖の第二成分(Second Pair Part)を迎える。これは、話題を変えてもよい位置でもある。

そこで11-25行目でYは、専門用語の外国語での困難性に関する語りを、前の話題に接続する形で始める。それは、英語で見た本の専門用語がわからないので、辞書を引いた、という、記憶としてラベル付けされたものである。それに対して、Mは26行目で、英語であればわかるのだが、日本語だからわからない、と再度断片直前の話の要点を繰り返している。

この断片から23-25行目でのYの「記憶がある」という発話の特徴を3つ、記述できる。

まず、①語りの終わりを表示し、相手からの反応を適切にする場所を設置している。Yの25行目の「記憶があるよ」に近接する形で、Mは次の発話を始めているが、それまでMは「ん::」等の短い応答によりYが複数のターンを保持し続けることを了解している。それゆえ、「記憶があるよ」の発話は、語りの終了を示すオチ(punch line)として用いられていると記述できる。

さらに、②「記憶があるよ」ということは、この断片の直前で行われたMが困ったという語りに親和的(affiliative)に接続している。言い換えれば、YはMの語りから得た命題(専門用語は外国語でわかりにくいこと)を含む同様の体験を語ることで、Mの語りの内容が、確かに「辞書を引くぐらいに」困難なものである、とみなしているように発話されている⁵。同時に、相手を「専門用語が

わからない者」という同一の成員に組み込む語りを展開することで、前の話題への親和的な態度を示す語りに用いられている。

そして③形式的に行為と結びつきにくい形で行われている。そもそも、「記憶がある」ということは、共感を示すことが連鎖の位置の上で可能であるとしても、それを、例えば32行目で実際に「やり直している」ように「確かに専門用語は難しいよね。」と共感を明示してはいない。この断片での「記憶がある」の発話は、機能(function)一言語形式(formulation)の関係が希薄な発話(cf. Schegloff 1984)をまずは選択しているといえる。とすれば、それはその発話機能を相手に選択させることになる。相手は「それってどういう意味」と聞くこともできれば、「そうなんだ」とそれを単に情報提供として聞くこともできる。それゆえ、相手の捉え方に依存した語りの終了方法であると言える。

次に、同様の活動が行われていると記述可能な断片2を記述する。

断片2 CallFriend 6167 フォートワースいくのとか聞いてた記憶

((同じテキサスの大学(UMHB)に留学していたLと、現在留学中のRの2人が話している。断片以前に、Lは同じ時期に留学していた日本人クラスメートたちの欠点を揶揄し、Rもそれに同意している。共通の知人ガッチャンの彼女によって迷惑を受けた人がいるというガッチャンのはた迷惑さについて語られた後。))

00 R: huhuhh hh! 一番迷惑してたのまさだった*んじゃないかっていうの

01 もあるんだけどねえ*

【意見提示】

02 (0.6)

03 L: うう::ん。

04 (2.6)

05 L: 多大にい。huhh

【同意】

06 R: うんたがいいこい。

【意見提示】

07 L: huhhh

【同意】

08 (0.8)

- 09 R: [huhahahah(.)][huhh
 10 L: [hehe [hhh
 11 (.)
 12 R: .hhhh ああ! .hhh そういえばあガッチャンがあまさにい、
 13 R: (.)あのお¥「こん::kuku今週末うフォートワース⁶いくのお::」とか¥
 14 R: → ¥聞いてたなんか記憶があるのなんかあ¥ 【語りの開始-終了】
 15 (0.8)
 16 L: ¥へ¥eehe? 【修復要求】
 17 (0.7)
 18 R: 「フォートワース行くのお::」とかいって聞いてたじゃん
 19 毎週末のようにい。 【修復操作】
 20 L: ¥うう::ん毎週末聞いてたねえ¥ 【受け取り】
 21 (0.3)
 22 R: → ああ::れを俺はふっと思い出したんだそういえばあ。 【14のやり直し】
 23 L: .hhhhh [へg-うんな¥毎週末いけるわけねえじゃねえか¥ 【揶揄】
 24 R: [huhh huhh huh 【笑いへの誘い】
 25 R: [hehehh
 26 L: [hhhh ¥「サイトウくん」みたいなあ¥ ((ガッチャンのこと)) 【揶揄】
 27 (1.5)
 28 R: あぬう::ん。 【同意】
 29 L: だってなあもう結局う、(1.4)もうう::んでももう、
 30 あそこ((UMHB))はいいやあって感じかなあ 【意見提示】

まず、「記憶がある」は①Lの語りの終わりを表示し、Rからの反応を適切にする場所を設置している。これまでRとLは知人の噂話をしているが、そのターゲットがガッチャンに移る。その後、ガッチャンについて低評価的な発話がLからなされる。12-14行目のRの「記憶がある」発話は、笑いを含みながらなされているため、Lの笑いの反応が適切になるTCUの終わりの位置⁷であると記述できる。

しかし、15行目の沈黙、16行目の「 \forall へ \forall eehe?」で、修復 (repair; Schegloff, Jefferson and Sacks 1977)⁸が開始される。これは非特定型の修復開始子（‘Open’ class repair initiator; Drew 1997）であり、同時に、笑いを含んだ反応であるために、単に聞き取りや理解の修復開始なのか、それともRの語りに対しての第二成分としての同意の反応であるのかが、Rにとってわかりにくくなっている。

それに対し18行目でRは、ガッチャンの発話を再演し、さらにそれがLも知っているはずであるというスタンスを「ジャン」を用いて示している (cf. 千々岩 2015)。19行目でさらにそれが「毎週末のよう」であるという頻度を表示する。

しかし、20行目は修復先である12-14行目に対する反応が起こるはずの場所であるが、Lは直前の18-19行目への反応しかしていない。そのために、22行目でRはそれを「ふっと思い出したこと」としてやり直している。それによって、Rは12-14行目をやり直すとともに、Lの反応を引き出す機会を与えている。

このように記述すると、「記憶がある」という発話は、②ガッチャンを挿入する活動において、R自らガッチャンを挿入する語りを示すことで、Lに対して親和性を示すことがなされている。12-14行目でRは、フォートワースに行くといっていた記憶を端的に語っているわけではない。むしろ直前にLが行った「ガッチャンは困ったやつである」という命題を含むガッチャンへの挿入に対する【賛同】を生成しているように見える。

しかし、③その形式／言い方は、その機能が曖昧であるといえる。そもそも、11行目は、まったく別の話題にも変えることができる位置であるといえる。それゆえ、Lには、語りを聞いてそれを遡及的に適合 (retrofit; Mandelbaum 2012, p.499) させ、話の続きとして聞くことが求められる。しかし、15行目の沈黙は、Lが記憶を語ることが、挿入を補強するような【賛同】としてRに理解されていないことを示している。20行目でLは、Rが単に事実を述べているものとして聞いている。その結果に22行目の「やり直し」が起きている、と記述できるだろう。

それゆえ、形式的には曖昧であり、相手に反応の選択権を与えるような発話であっても、話し手はRが22行目で行うように、後にやり直しによって、相手に

再度適切な反応を返すことができる場所を提供することができる。

次に、比較的長い断片3を観察する。

断片3 CallFriend japn1841 心理学のテストを受けた記憶

((電話の掛け手であるMが、会話録音の目的についてYから質問をされている。しかし、Mは詳細について知らないため、予測で答えている。会話の内容に制約はなく、しかし音声学の録音でもないことがMから話されている。それに対して、Yは不思議だね、と述べている。その後、メグミ＝Mが研究に関わっていないことを確認する。))

- 12 Y: メグミが調べてること[じゃないんだ。 【確認要求】
- 13 M: [あこれは全然あたし関係ないもん。 【確認】
- 14 Y: へ::[:::.
- 15 M: [お::ん< .hhh なんかね::やれればいいんだけどね! 【意見提示】
- 16 (0.3)[そのお-
- 17 Y: [不思議だね::: 【意見提示】
- 18 M: うう::ん_
- 19 Y: へえ:::[_
- 20 M: [↑だからこれ((電話))あたしかけていいんじゃない? 【意見提示】
- 21 (0.2)
- 22 M: ↑かかわってたらやっぱり
- 23 やっ[ちゃいけないの[かもしれない 【意見提示】
- 24 Y: [あ [なるほどね 【理解】
- 25 M: う::ん、よ[くわかんないけど。 【意見提示】
- 26 Y: [あ::ん。 【理解】
- 27 (0.2)
- 28 M: .hhh は::[ん
- 29 Y: [TTTT大んとき心理学の::テストとかいうの
- 30 やらされたよ。 【情報提供】

- 31 (0.3)
- 32 M: あ[そ:: 【情報受理】
- 33 Y: [>やらされたっていうか<(0.2)なんかやっぱ 【語り】
- 34 みんな卒業<する>人たちがさ::
- 35 M: ふ::ん
- 36 Y: 卒業::>え<-なんか論文かなんかにやるってゆうんで::
- 37 M: [う::ん
- 38 Y: なんで::あの:::(0.7)受けてくださいとかいう°-受けてくれ
- 39 る人いませんかとかいうから::
- 40 M: う::ん
- 41 Y: → 受けた記憶があるよ. 【語りの終了】
- 42 M: .hhh >それ<タダでやんの? 【情報要求】
- 43 (0.4)
- 44 Y: それはもちろんタダだけど:: 【情報提供】
- 45 M: ふ::ん
- 46 Y: なんかそれでいっぱいあの(.)hhなんていうの?し-tu問題に答えなき
- 47 やいけない= 【語り】
- ((28 行省略: 大量の心理テストの中に、真面目に答えているかを確認するために、まったく同じ質問が二度出てきたり、変な質問(「私は絶対に嘘をついたことがない」等)があったことがYによって語られる。))
- 48 Y: それからその(.)なんか .hhあの:(.)「どこかで
- 49 (0.2)声が聞こえる」とかね?
- 50 M: ん:
- 51 Y: なんかへ(h)ん(h)な(h)y-質問がいっぱいあってさあ,
- 52 M: うん:
- ((以下、語りが続く))

「記憶がある」の発話は41行目でなされている。

この断片が始まる前からすでにYは、電話の掛け手であるMにこの録音実験

の目的を尋ねている。しかし、Mはそれを十分に答えることができない。

さらに、12行目でMが実験にそもそもかかわっていないことが明らかになる。そこで成員カテゴリーは変更され、17行目で目的がわからないことを「不思議だね」と言い合うMとYは、同一の成員カテゴリー（「目的のわからない実験を受けている人たち」）にあると述べている。

20行目のMの発話は、録音目的を知らないからこそできる発話であり、25行目で「知らないけど」と述べていることから、録音に関わっていない人物であることが再度語られる。

その直後29-30行目のYの情報提供は、Mの録音実験と同種の話として聞かれる位置である。ゆえに、29-30行目の発話は、第2の語り以下に生ずる可能性を示すものであるといえる。

特筆すべき点は、33行目である。YはMの受け取りの発話を聞くや否や、話速を速めて「>やらされたっていうか<」と述べる。前の発話、特に30行目の「やらされた」という語彙選択（word-selection; Kitzinger & Mandelbaum 2013）の間違いを修復し、自らを積極的に受けた者として振る舞い直している。

41行目の「記憶がある」発話は、①語りの終わりを表示し、相手からの反応を適切にする場所を設置しているといえる。その次の42行目はMの反応が適切になっている。ここでMが謝金について尋ねていることから、それがわかる。

そして、Yは、ボランティアとして心理テストを受けたという「記憶がある」で終わる語りで、②「目的のわからない不思議な実験」を受けたもの同士、という同一の成員カテゴリーを示すY自らの経験を語っている。そのために、その直前にYとMが今まさに体験している「目的のわからない不思議な実験」という概念によって、自らの経験を語っている。それにより、その接続関係に対する期待から、相手の境遇への親和的な態度をあらわしている。その後42行目でMが謝金について尋ねていることが、YだけでなくM自身もこの語りを類似のものとして捉えていることの証拠になる。「あなたのストーリーでの実験ではタダだったのか？」と、この録音実験と類似したものとして聞いているために、この場所で情報を要求することが可能になっていると言えるだろう（ちなみにMには謝金が支払われている）。

しかし、③形式が親和的行為と結びつきにくい形で行われているとも記述できる。Yの語りは共通点を示すのに不十分であるともいえる。というのも、Mの42行目の謝金の質問は、実験のボランティアという点では類似性を表しているものの、実験目的の「不思議さ」についての理解ではない。言い換えれば、Mの質問は“的を射ていない”ということになる。

それを証拠に、Yは46行目で第2の語りを再度語りなおして、語りの終盤、50、52行目で、実験中での質問群が変である、という体験を明示的に語っている。これは、17行目の「不思議だね」に類似する表現である。

6. 考察と結論

本節では、第5節で分析した断片群について分析を統合し、考察、特徴を記述する。

6-1. 特徴①「第2の語り」の終わりの表示

「記憶がある」ことへの言及は、「第2の語り」の終わりを表示し、相手からの反応を適切にする場所を設置することができる。

この特徴は、記憶が多くの場合語りと関連付けられて語られる原因ともなっているといえる。語りの終わりを「Xがある」の形で示すことは、それ以前がそのXと関連付けがちだ。例えば、「興味があります」で終わる場合、それ以前に興味の対象をして聞くことを要請する。同様に、「記憶がある」ということは、記憶の中に語りがあり、それをあらわしているのだ、というように聞かれうる。

しかし、そもそも日本語では、「ある」は動詞である。そのため、日本語の統語構造では文の後方に配置され、TCUの終わりに配置されがちだという性質がある。また、日本語では統語的に早期の投射が困難であるという（「遅れた投射可能性 (delayed projectability)」; Fox, Hayashi and Jaspersen 1996)。ゆえに、日本語の統語上の制約を利用して、TCUの終わりを示すために用いやすい、という記述がまずは可能であるだろう。それは、言語構造上の制約であるともいえるため、記憶があることと語りの内容とを積極的に結びつけることは誤謬ともいえる。

また、Hacking (1995 = ハッキング 1998) や浦野(2007) が述べるように、記憶を語ることは、体験そのものを語るのではなく、その体験を現在得た(新たな)命題や概念を用いて体験を再記述する作業である。

これをデータに即して記述しなおすとすれば、まず、確かに①「記憶がある」は、動詞「ある」の現在形を採用しており、現在のことを語っているように発話をデザインしている。また、②発話者は相手の第1の語りでの愚痴や、問題等への評価の語りから得られた命題や概念を利用して、自分の体験を再記述している。それを行うことで、類似性のある体験を証拠として提示し、自分を相手と同一の体験をした存在へと変換させていると言えるだろう。

これは、「記憶がある」が第“2”の語りとして成り立っている = 聞かれうる理由でもある。言い換えれば、「記憶がある」で終わる第2の語りの内容は、類似しているというだけではなく、第1の語りによって生み出された命題や概念を自らの体験に還元、記述することによって成り立っている。「記憶がある」という発話は、その活動を現在の段階に行ったことを効率的に指示することができる形式であると言える。

6-2. 特徴② 親和性の表示

「記憶がある」ということは、その前方に配置された第一の語りを含む評価、愚痴、不満等に対して、それに類似した語りを提供することで、親和性を示す手続きとして用いられている。

6-1 で見たように、「記憶がある」と語りを終えることは、直前の命題や概念によって過去の体験を再記述することであるといえる。例えば断片1では、「専門用語は外国語ではわからない」という命題によって、経験を振り返り再記述したのだ、ということをも「記憶がある」ということによって示している。それは、「あなたが先ほど語ったまさにその同じ命題によって記述された経験であるのだ」ということを明示する。

同時に、【共感】や【賛同】などの行為は、それに必要な証拠を示す必要がある。まったく別の概念を持っている人が、「共感するよ」「賛同するよ」と直接的に語ることは、「口でだけそういつているのだ」ということになりかねない。そ

の根拠を示すことをしていないからだ。

これらのことから、「記憶がある」ということは、他の参加者が示した命題や概念を理解したことを、体験を再記述しながら証拠立てて示すことで、【共感】や【賛同】といった親和的な行為を行っている、というわけである。

ただし、以下の6-3で示すように、それが参加者によって即時に親和的な行為として受け入れられる、というわけではない。

6-3. 特徴③ 曖昧さによる判断の依存

「記憶がある」ことへの言及を持つ述部の形式は、行為と結びつきにくい形式であると言える。そのため、どのような反応が期待されるのかがわかりにくい。

先に、「記憶がある」ということが【共感】や【賛同】に用いられることを見たが、この方法は証拠を出すだけにとどまり、その証拠をどうとらえるかの判断を他の参加者にゆだねているように見える。

このような形式—機能の関係が緩い発話要素において、反応を産出する側がそれを【共感／賛同】として聞くか、それ以外のものとして聞くか、の予測は時に困難を伴う。とすれば、ここで最も効果的に「証拠を示しながら」「形式と機能が結びつく形で」行うとすれば、以下の作例1のような形を用いるのはどうかと考えるかもしれない。

しかし、「共感する」「賛同する」と述べても、それは単に宣言になってしまい、せつかくの証拠が“台無し”になってしまう可能性がある。むしろ、作例2のように“共感を示す”発話（平本2011）が用いられるだろう。

作例1：Vた記憶があるから、（私はあなたに）共感する／賛同する。

作例2：Vた記憶があるから、よくわかるよ。

しかし、東北大地震の後の足湯ボランティアの相互行為を記述した岩田(2013)が述べるように、共感を示すためには共感の証拠を明示が必要ある。それ無しでは、相手の固有の経験を脅かしてしまう危険が伴う。言い換えれば、作例2ですら、「あなたはなぜ私の固有の経験に、よくわかると言えるのか」と、証拠不足

のために、相手の経験を脅かしてしまうかもしれない。それを回避するため、岩田によれば、ボランティアを行う人はたびたび、共感として聞き得る場所に共通性を言語的に非明示的に配置し、それを共感する側に操作させる様子を記述している。

1 から 3 の断片では、この断片の前方に、聞き手が直面している困難点や揶揄等が、「わかるよ」等の決して明示的を伴わない形で語られていた。それは「ほのめかされていた」といってもいい。それぞれの状況において、ほのめかしに対して記憶を語る聞き手にとって、自らの経験が理由となりうるのか困難点や揶揄と同等の性質を持ち合わせているか、共感や賛同に十分に値するかどうかの判断は時として困難だろう。それゆえ、「記憶がある」ということは、直接的に言語化する方法を避け、相手に自らの経験を再記述した形で述べることにより、それが共感や賛同に十分に値するかどうかを、他の参与者にまずは依存している、という記述が可能であると考えられる。

仮に、聞き手が語り手の語り【共感】等に値しないと判断するならば、それを単に「思い出したこと」として聞くことで（「へー、そうだったんだ。」）、受け流すことが出来るだろう（cf. Pomerantz 1970）。また、話し手が、相手が、親和的であることを理解していないと考えるならば、断片 1 の 32 行目 Y のように、より直接的に言語化する方法に移ることも可能である。

7. 総括

本稿では、日常の雑談の中の“記憶があること”に言及する発話が、①語りの終了を示す資源であること、②体験を述べることで相手に共感や賛同といった親和的（affiliative）な行為であること、③相手に親和的になることのできる証拠として利用可能かの判断をゆだねていること、の 3 点を特徴とすることを、会話分析の手法を用いて例証した。

「記憶がある」という発話が用いられる語りは、発話者が前の会話から得られた概念を用いて、連続した経験から新たに経験をその概念を用いて再記述することであると同時に、親和的態度を示すことに用いられている。ゆえに、その語りは文脈上、前の発話に接続した場所に出現する。

このことから、連続した経験からあらかじめ有意なものが選ばれて貯蔵されて、適時必要な情報を利用している、ということではないことがわかる。なぜなら、それが未来において必要であるかどうかは、過去のある時点においてはわからない。もし仮に「この体験はもしかしたら何かに用いることができそうだから、記憶の引き出しにでもしまっておくか」と選択的に記憶しているとすれば、その選択の基準は何によって生まれるのか、という説明が必要になってしまう。仮に“記憶に残る”特異なことを覚えている、というのであれば、なぜ我々は些末な過去の出来事を語ることが可能なのか。むしろ順序は逆で、今新たに得た命題や概念(=他の参与者による評価)において、ある経験を“些末ではないもの”として、親和的態度の証拠・資格として、扱っているのではないかと推察できる。

だとすれば、(本稿で論じる限りにおいては)「記憶がある」ということは、記憶の存在を主張しているわけではなく、またその存在が脳内のどこかにある、ということを描べるために言っているわけではない。むしろ、新たに得た概念を用いて体験を再定義し、相手への親和的な態度を表示するための、一つの相互行為的な資源になっているといえる。

注

- 1 Coulter(1999) が行った DP 批判に対して、Potter and Edwards(2003) が行った反論には、狭義には DP は心理学的要素を前提としない、と明記されている。しかし、Potter and Edwards(2013) の説明では、一転して、DP は従来心理学で扱われてきた要素をトピックとしてあつかう、としており、2つの立場が混在していることがわかる。そもそも、Coulter(2004) が述べるように、心理学的な現象に関して Potter and Edwards (2003) の「心理学的要素非容認論」を取るのであれば、DP は CA と何ら変わらない手法を選んでいることになり (Coulter 2004 ; p.335)、Coulter 自身の言葉を借りれば「特別の存在理由はない (a programme without a genuinely distinctive *raison d'être*)」。
- 2 例えば友人に「元気？」と聞いたとする。もし返答までに5秒の間があったとしたら、それは「すぐに答えられない事情」があることとして理解されるかもしれない。逆に

連接 (latch) していれば、それを「あらかじめ予測していたもの」として受け取られる可能性もあり、不自然である。ゆえに、人々は返答のタイミングに関して組織だった体系を有していると推察できるが、それが示されていないことは後の研究者の検証を阻む要因となる。

- 3 成員カテゴリーとは、会話中に局所的に決定される、参与者 (= 成員) の属性のことである (cf. Sacks 1992 vol.1, pp.40-48, Stokoe 2012)。たとえば、著者を記述する語には「男性」「花粉症の患者」「愛猫家」「Lenovo のパソコンを使っている人」などがあるが、すべてが会話において有意とはいえない。耳鼻科では花粉症の患者としてふるまうかもしれないが、場合によっては男性や、愛猫家としてふるまうかもしれない。西阪によれば、想起の発話は、ある事柄について「語り合えない人」から「語り合える人」への成員カテゴリーの再構成であるという。
- 4 ただし、ハッキングも述べているように、これは「セラピスト批判」ではない。
- 5 ただし、Y のこの親和的な態度は受け入れられてはいない。まず、この断片直前に起こったからかいが“尾を引いている”ように見える。英語圏に長く住んでいるが単語を誤り、それが言語学を学ぶ学生の実力だからかわれた M は、09 行目を (実は正しくはないのだが) 誤っていない、正しいものとして産出している。それに対しての 23、25 行目の Y の発話は、「辞書を使う」という、語学学習者としての対処方法を示している。M が 26 行目で「英語で言ってくればわかる」と語気を強めて反論・防衛しているのは、その“辞書を使う”という行為が、英語に熟達していない Y と同じカテゴリーに所属「していない」ことを示す手立てになっているだろう。
- 6 フォートワース (Fort Worth) は、UMHB から 200km の位置にある繁華街。おそらく UMHB から一番近くにある学生たちが「遊べる」ところであるのだろう。200km 離れた遊ぶ場所に“毎週末のよう”に行こうとするガッチャンに対する揶揄として働いている。
- 7 TCU (turn constructional unit ; Sacks, Schegloff and Jefferson 1974) は、話者交代システム (turn-taking system) における発話の単位。TCU が終了すると、徐々に TRP (transition relevance places) が発生する投射が高まっていく。
- 8 修復 (repair) は、会話中における問題 (聞き取り / 理解) への対処に関する一連の組織だった行為。ここでは、笑いを含んだ「へ？」が、理解しているから笑えていると

いう捉え方も可能であるし、聞き取れないから「へ？」と聞いている可能性もあるために、Rにとってわかりにくいものになっている。(cf.Schegloff 2007)

参考文献

<和文>

- 岩田夏穂 (2013) 「共通性を示すこと」『共感の技法』勁草書房 pp. 141-156
- 浦野茂 (1999) 「想起の社会的コンテクスト」『現代社会理論研究』(9) pp.109-21.
- 浦野茂 (2007) 「記憶の科学: イアン・ハッキングの「歴史的存在論」を手がかりに (記憶の社会学)」『哲學』117 pp.245-66.
- 千々岩宏晃 (2015) 「日本語の雑談での「あなたに関する知識を示す発話」の会話分析を用いた研究: 発話末の下降調の「ジャン」に着目して」『日本語・日本文化研究』25 pp.78-89
- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』くろしお出版
- 西阪仰 (1997) 『相互行為分析という視点』金子書房
- 西阪仰 (2001) 『心と行為』岩波書店
- 西阪仰[他] (2013) 『共感の技法』勁草書房
- 平本毅 (2011) 「他者を「わかる」やり方にかんする会話分析的研究」『社会学評論』62 (2) pp.153-170
- 前田泰樹 (2003) 「記憶の科学の思考法 - 失語症研究と想起の論理文法」『文明』(3) pp.45-55
- 前田泰樹 (2008) 『心の文法: 医療実践の社会学』新曜社

<英文>

- Coulter, Jeff (1979) *The Social Construction of Mind*. Macmillan (=1998, 西阪仰[訳]『心の社会的構成』新曜社)
- Coulter, Jeff (1999) "Discourse and Mind". *Human Studies* 22, pp.163-181
- Coulter, Jeff (2004) "What Is "discursive Psychology"". *Human Studies* 27(3), pp. 335-40
- Coulter, Jeff (2005) "Language without Mind" in Molder, H. and Potter, J. eds., *Conversation and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.79-92
- Drew, Paul (1992) "Contested Evidence in Courtroom Cross-Examination: The Case of a Trial for

- Rape". *Talk At Work: Interaction in Institutional Settings*, pp.470-520.
- Drew, Paul (1997) "'Open' Class Repair Initiators in Response to Sequential Sources of Troubles in Conversation.", *Journal of Pragmatics*, 28, 69-101.
- Drew, Paul (2005) "Is Confusion a State of Mind". te Molder, H. and Potter, J. eds., *Conversation and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.161-183.
- Edwards, Derek and Jonathan Potter (2005) "Discursive Psychology, Mental States and Descriptions" te Molder, H. and Potter, J. eds., *Conversation and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.241-259.
- Fox, B., Hayashi, M. and R. Jasperson (1996) "Resources and repair." E. Ochs, E. Schegloff and S. Thompson eds. *Interaction and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.185-237
- Goodman, S. and K. Walker (2016) "Some I Dont Remember and Some I Do: Memory Talk in Accounts of Intimate Partner Violence". *Discourse Studies* 18(4), pp.375-392.
- Goodwin, Charles (1987) "Forgetfulness as an Interactive Resource". *Social Psychology Quarterly* 50(2), pp.115-131.
- Hacking, Ian (1995) *Rewriting the Soul : Multiple Personality and the Sciences of Memory*. Princeton University Press.(=1998. 北沢格[訳] 『記憶を書きかえる』. 早川書房)
- Hayashi, Makoto(2012) "Claiming Uncertainty in Recollection: A Study of "Kke"-Marked Utterances in Japanese Conversation". *Discourse Processes: A Multidisciplinary Journal* 49(5), pp.391-425.
- Jefferson, Gail (1978) "Sequential Aspects of Storytelling in Conversation". Schenkein, Jim eds. *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, New York, NY: Academic Press. pp. 219-48.
- Kitzinger, C., & Mandelbaum, J. (2013) "Word Selection and Social Identities in Talk-in-Interaction" *Communication Monographs*, 80(2), pp.176-198.
- Lynch, Michael(2006) "Cognitive Activities without Cognition? Ethnomethodological Investigations of Selected "Cognitive" Topics". *Discourse Studies* 8(1), pp.95-104.
- Lynch, Michael and David Bogen(2005) "'My Memory Has Been Shredded': a Non-Cognitivist Investigation of "Mental" Phenomena". te Molder, H. and Potter, J. eds., *Conversation and*

- Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.226-240.
- Lynch, M. and Wong, J (2016) "Reverting to a Hidden Interactional Order: Epistemics, Informationism, and Conversation Analysis". *Discourse Studies* 18(5), pp.526-549.
- MacWhinney, B. (2007) "The TalkBank Project" J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl eds., *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1. Houndmills: Palgrave-Macmillan.
- Mandelbaum, Jenny (2012) "Storytelling in Conversation". Sidnell, Jack and Stivers, Tanya eds., *The Handbook of Conversation Analysis*, Blackwell, pp.498-507.
- Muntigl, P. and Kwok Tim Choi (2010) "Not Remembering as a Practical Epistemic Resource in Couples Therapy". *Discourse Studies* 12 pp. 331-356.
- Pomerantz, A. (1980) "Telling My Side: "Limited Access" as a "Fishing" Device", *Sociological Inquiry* 50(3-4): pp.186-198.
- Potter, Jonathan (2003) "Discursive Psychology: Between Method and Paradigm". *Discourse & Society* 14(6), pp.783-794.
- Potter, Jonathan (2006) "Cognition and Conversation". *Discourse Studies* 8(1), pp.131-40.
- Potter, Jonathan and Derek Edwards (2003) "Rethinking Cognition: On Coulter on Discourse and Mind". *Human Studies* 26(2), pp.165-181.
- Potter, J., & Edwards, D. (2013) 35. Conversation Analysis and Psychology, In. Sidnell, J. and Stivers, T. (ed.). *The Handbook of Conversation Analysis*, Wiley-Blackwell, pp.701-725.
- Sacks, H., Schegloff, E., & Jefferson, G. (1974) "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation" *Language*, 50(4), pp.696-735.
- Sacks, Harvey (1992) *Lectures on Conversation*, Volume I, II., Blackwell
- Schegloff, Emanuel A. (1984) "On Some Questions and Ambiguities in Conversation". *Structures of Social Action. Studies in Conversation Analysis*, pp.28-52.
- Schegloff, Emanuel A. (2007) *Sequence Organization in Interaction*, Cambridge University Press
- Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. (1977) "The preference for self-correction in the organization of repair in conversation" In G. Psathas eds., *Interaction Competence*, Washington, D. C.: University Press of America. pp.31-61.
- Shaw, Rebecca and Celia Kitzinger (2007) "Memory in Interaction: An Analysis of Repeat Calls to a

- Home Birth Helpline". *Research on Language and Social Interaction* 40(1), pp.117-144.
- Shuman, Amy (1986) *Storytelling Rights : The Uses of Oral and Written Texts by Urban Adolescents*. Cambridge University Press.
- Smith, Michael Sean (2013) "'I Thought" initiated Turns: Addressing Discrepancies in First-Hand and Second-Hand Knowledge". *Journal of Pragmatics* 57, pp.318-330.
- Stensig, Jakob(2012) "Conversation Analysis and Affiliation and Alignment". Carol A. Chapelle eds. *The Encyclopedia of Applied Linguistics* (Wiley Online Library : <http://onlinelibrary.wiley.com/> 最終確認 : 2017年12月27日)
- Stivers, Tanya (2008) "Stance, Alignment, and Affiliation during Storytelling: When Nodding Is a Token of Affiliation". *Research on Language and Social Interaction* 41(1), pp.31-57.
- Stokoe, E. (2012) "Moving forward with membership categorization analysis: Methods for systematic analysis" *Discourse Studies*, 14(3), pp.277-303.
- Woolffitt, R. (2005) "From Process to Practice: Language, Interaction And" flashbulb" memories". te Molder, H. and Potter, J. eds., *Conversation and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.203-225.

付記

本稿に用いた文字化記号 (西阪[他] 2013 を参照)

.	下降調であること	.hhh	吸気	¥文字¥	笑いを含んだ発話
,	継続調であること	hhh	呼気	文(h)字	笑いながらの発話
文字	平板調であること	文字?	発話末音の上昇	>文字<	話速が早いこと
↑文字	音の急激な上昇	文字 _↑	発話末音の上下動	<文字>	話速が遅いこと
↓文字	音の急激な下降	文字!	勢いのよい発話末	文・	音の突然の途切れ
文字:	音の引き伸ばし	°文字°	話声が小さいこと	文字	話声が大きいこと
[文字	2行で発話重複	文字	話声が大きいこと	字=字	途切れない発話
(0.0)	間隔をあらわす	「文字」	引用をあらわす	→	分析の焦点

筆者名 チヂイワヒロアキ (所属) 大阪大学大学院言語文化研究科 博士後期課程

〈キーワード〉 記憶 想起 相互行為 会話分析 親和的

A Conversational Analytic Approach to Remembering in Japanese Casual Conversation

CHIJIWA Hiroaki

This study revisits the concept of remembering by using the Conversational Analytic method. This study describes that when ending a phrase with *Memory Words* such as “Kioku ga Aru” (I have a memory of...) and “Oboeteiru” (I remember that...), these words are in fact the social resources to present speakers’ affiliative attitudes such as agreeing or sympathizing with previous talks/speakers in Japanese casual conversation.

Despite the fact that the concepts of remembrance or recollection have been studied since 1970, there is little research in the social functions of mental predicates of remembering (such as remember, recall, and recollect) in casual conversations.

In this study, three characteristics of *Memory Words* are described by providing actual excerpts. First, it indicates ends of speakers’ stories and by doing so, speakers provide slots for responding. Second, stating the existence of memory is not to prove that memories exist, but it is rather a method of achieving affiliative attitude. Third, by leaving the utterance ambiguous, using *Memory Words* leaves listeners two choices; that is, a) to take speakers’ experience as worthy to be affiliative, or b) to take speakers’ experience as non-compatible experience for affiliation, thus perceiving them just as reports of their past experiences.